

「学校に行きたくない」と子どもが言ったとき

子どもが「頭が痛い」、「学校に行きたくない」などと言って欠席が続くと、ご家族はとても心配されます。周囲から「連れてゆけばなんとかなる」などと言われて登校させようとしてもだいたいは失敗します。これを以前は「登校拒否」と呼び、本人の性格や家庭の養育の問題で「学校ぎらい」なためと考えていました。しかし、長期欠席児は増え続け、文科省も、いじめや学業不振、教職員への不信感など学校での問題も原因となる、「登校すべきとわかっているけれど登校できない」状態であると認識を変え、呼び名も「不登校」に変わりました。体調不良・不安が強い・家庭環境の大きな変化などの本人の理由、友人関係・先生との関係・勉強が辛いなどの学校生活の悩みは小中を通じて多い理由です。

当の本人はゲームや動画で遊んでいるようにみえますが、心の奥では「学校に行かなければいけない」と強く思っています。ただ、学校の楽しさよりつらさのほうが強いので登校できないのです。文科省の令和4年度全国調査で年間30日以上の欠席者は小学生1.7%、中学生6.0%で合わせて約30万人に急増しました。これに対し市町村の教育支援センター（適応指導教室）や民間機関（フリースクール等）の利用、学校以外の機関での学びやICTによる学習活動を出席扱いするなど様々な支援があります。

不登校のときには、お腹や頭が痛い、食欲不振、情緒不安定、家庭学習に手がつかない、眠れないなどの症状も伴い、これらは子どものSOS信号です。こんな子どもが「学校休みたい」と言ったら、まずは十分に休ませてあげてください。子どもの話をよく聞き、登校を急かせないでください。家庭で落ち着いて過ごせば、たとえ時間がかかったとしても子どもたちはいずれ社会に出てゆきます。実際、平成18年と古い調査ですが不登校中学生の85%は高校に進学しました。ご家族も心配とは思いますが、まずは休みたいという子どもの意思を尊重し、笑っておしゃべりできる落ち着いた家庭環境を整えることが大切です。

不登校の相談先には、学校の先生やスクールカウンセラー、フリースクールなどがあります。また、体調不良に関しては当院小児科で対応できますので、心配なときはご相談ください。

【副院長兼小児科診療部長 大木 康史】

